

優秀賞 水の週間実行委員会会長賞

あたり前の生活

福島県 大熊町立大熊中学校

二年

岡田 愛莉花

どこにでもあり、いつでも手に入る。それが、震災前の私の水への考え方だった。学校から帰り、手を洗う時、蛇口をひねれば簡単に水が出る。喉が渴けば、コップに注げばいい。そんなことは日常生活においてあたり前のことであり、そう考えていたのは私だけではないはずだった。しかしあの日、大震災が私達を襲った日、水の恐ろしさと有り難さを私達は思い知らされることになる。

三月十一日。私は下校途中に地震に遭い、自宅の様子や家族の安否が心配で、不安な気持ちをおさえながら足早に家へと向かった。自宅に戻り玄関の戸を開けると、家族の顔は青ざめ誰もがオロオロするばかりだった。私の頭も混乱して、今何が起きているのか飲み込めないでいた。さらに追いつちをかけるように余震が次々と私達を襲ってきた。私は恐怖のどん底に突き落とされていった。停電し、暗闇へと姿を変えた町。何もできずに家中で丸くなって震えていた私は、手さぐりでトイレを探した。その時、ある事が私を困らせた。水が流れないのだ。祖母に伝えると、祖母は普段溜めていた雨水を使い流してくれた。祖母たち大人は、「断水」という私には聞き慣れない言葉を口にしていった。翌朝、私は水道で手を洗おうとしたり、水を飲もうとしたが、その後水が姿を現すことはなかった。私達の住む大熊町には、東京電力福島第一原子力発電所があり、その発電所の事故で避難を余儀なくされ、私達は避難所を転々とすることになった。津波の被害を知ったのは、田村市の文化センターへ避難した数日後のことだった。東北沿岸部のあちこちで、水が人間に牙をむいたのだった。多くの尊い命や建物を一瞬のうちに奪った海。恐ろしかった。幼い頃、祖父母と遊んだあのキラキラ輝いていた美しい海が、初めて恐ろしいと思った。水は大切だ。と言われても、ぴんと来ないのが本音だ。今回起きた津波や水難事故。これらをまとめて「水」と考えた時、素直に大切だとは思えなくなってしまう。しかし、それらを水の全てと考えるのではなく、水の一面と捉えた時、水はただ恐ろしいだけのものではなくなるのではないだろうか。逆に、水が消えた地球を想像してみる。水不足が世界中で起こった時、地球の動植物、そして人間の命は失われるであろう。私達が生きている「あたりまえの生活」は、水があって初めて成り立つものなのだ。避難先の体育館で、久しぶりに水を口にした。支援で頂いたミネラルウォーターは、涙が出るくらい美味しいものだった。手を伸ばせば、いつでも手に入る水が、とても貴重なものだと気が付いた瞬間だった。「たかが水だろう」と思う人もいるかもしれない。だが、「たかが水」ではないのだ。なぜ私達は今まで好き勝手に水を使い、貴重なものとして扱ってこなかったのだろう。水は身近なものだからこそ、その大切さに気が付かないのかもしれない。

水は資源というもの以上に、私達人間の命そのものだと思う。水を守るといふ事は、命を守るも同然。だが使い方を誤れば、水は人間の命を奪う凶器となってしまう。津波などのように、時折、水は暴走をしてしまう。私たちは、一日も早く暴走を食い止めるための対策を考え、実行していかなければならない。つまり、水の利便性と危険性を十分理解し、正しく安全に効率的に使わなければならない。それが、私達人間が水を使うことへの責務なのだと思う。

私は大震災から多くの事を考えさせられ、たくさん学んだ。全国の方の温かい心にも触れ涙した。そんな中、改めて「水」について考える機会を与えられたことに感謝したい。この貴重な経験から、水があるから人間が存在できるという事を心に刻み込んでおきたいと思う。そして、穏やかで「あたりまえの生活」が一日でも早く訪れる事を願っている。